

ビルマ地域研究の基本文献

入門・概説書

- ・田村克己・松田正彦 2013 『[ミャンマーを知るための60章](#)』明石書店

現在活躍する研究者から実業家、留学生に至る69名のミャンマー専門家が執筆しており、広いジャンルをカバーする入門書。また後ろの文献紹介が丁寧で、これからミャンマーを学ぼうという人には最適の書籍といえる。

- ・伊東利勝編 2011 『[ミャンマー概説](#)』めこん

ビルマ人中心に書かれる入門書に対して、多民族国家のミャンマーに対応し、行政州を構成する7つの主要民族の歴史、文化、宗教、芸能などを、ビルマ人と同じ分量を配した意欲的な概説書である。ネイティブと外国人研究者には文化記述に若干のスタンスの乖離があるが、それも含めて少数民族理解にふさわしい書籍といえる。

- ・田辺寿夫、根本敬 2012 『[アウンサンスーチー 変化するビルマの現状と課題](#) (oneテーマ21)』角川書店

スーチー氏の思想と急変するビルマ情勢の説明、課題などがコンパクトにまとまっている。

専門書

【政治・経済】

- ・工藤年博編 2012 『[ミャンマー政治の実像：一軍政23年の功罪と新政権のゆくえ](#) (アジア研選書)』アジア経済研究所

23年間続いた軍事政権時代を振り返り、経済、政治、選挙、民族、宗教、教育等の観点から政策を中心にまとめ、今後の考察に繋げたもので、現在利用できる政治、経済関連の最もまとまった書籍である。

- ・中西嘉宏 2009 『[軍政ビルマの権力構造—ネー・ウィン体制下の国家と軍隊 1962-1988](#)』京都大学出版会

ビルマ独立後26年間にわたってビルマを統治し続けたネーウィン体制下の国軍の権力構造について、成立から終焉まで膨大な資料とインタビューをもとに実証的に明らかにした研究書。ネーウィンが実質的に完成させた国軍による政治システムはその後の軍事政権にも引き継がれており、現代政治を理解するための必読書である。

- ・高橋昭雄 2012 『[ミャンマーの国と民](#)』明石書店

さまざまな場所で長期を掛けて筆者が行ってきた農村調査をもとに、日本の農村とミャンマーの比較を試みた一般書で、農村や農村経済を理解するのに最適な書籍である。

【歴史・文化】

- ・根本敬 2010 『[抵抗と協力のはざま——近代ビルマ史のなかのイギリスと日本](#) (シリーズ戦争の経験を問う)』岩波書店

初代首相であるバモオ、独立の指導者アウンサン、彼の「暗殺者」ウー・ソオ、コミュニストやエリート官僚などの

資料をもとに、植民地ビルマが宗主国イギリスや日本にどう向き合い、いかに独立を達成したのかを辿った書籍。

・高谷紀夫 2008 『[ビルマの民族表象：一文化人類学の視座から](#)』法蔵館

多民族国家ミャンマーにおいて、シャンとビルマの関係を主軸に民族が互いにかに表象されるのか、ひいては民族概念がいかにかに紡ぎだされるのかを、民族間関係に着目し丁寧に描き出している。市民法などの解説も詳しい。

・生野善應 1995 『[ビルマ佛教：その実態と修行](#)』（新装版）大蔵出版

★図書館では [初版（1975年）](#) を所蔵

池田正隆 1995 『ビルマ仏教：その歴史と儀礼・信仰』法蔵館

ビルマ仏教理解には必読の書籍。著者二人ともウー・ヌ政権時代にビルマで得度しており、内側からの記述も多い。前者は出家の生活、儀礼、戒律や僧院内での暮らしが描かれ、後者では、ビルマで書かれた仏教史、歴史書などを丹念に当たり、バガン以降の仏教史が描かれている。

(2014年1月 土佐桂子)